

関係者ヒアリング結果まとめ

1 どのような認知症サポーターになってほしいですか？

【本人の声】

- ・一緒に買い物に出掛けたり、決まった曜日・時間に散歩をしてもらえることなど。
- ・自分の話を聞いてくれる専門的な人が欲しい。ケアマネに相談するのは、(多忙だろうから) 申し訳なく思ってしまう。
- ・介護してもらっているが、その方がいなくなるとパニックになる。近頃、以前は出来たのに、出来ないことが増えてきた。助けてもらうだけでなく、こちらの話に耳を傾けてくれるなど、思いを受けとめてくれる人が欲しい。
- ・色々な面で心の支えになってくれる人。他人に気兼ねして頭を下げて介護してもらうのではなく、当然の権利として助けていただければと思う。

【家族の声】

- ・まずは気にかけてくれるだけでいい。
- ・「出来ること」を具体的に提案し、「してもらいたいこと」とのニーズをマッチングさせる(包括?)。具体的にないと、活動に踏み出せない。
- ・必ずしも1対1で繋がるのではなく、何人かと繋がれるといいが、多すぎると別な問題が生じる?
- ・地域でのボランティアなどに参加してほしい。
- ・“気づき”ができる人。
- ・相手の自尊心を傷つけず付き合っていける人
- ・認知症を自分ごとと感じている人。
- ・認知症の人を安心して暮らせる地域を作る事で自分が認知症になってもその地域で暮らせると考えられる人

【その他】

- ・自分たちでどのような合理的配慮ができるか気づいてもらいたい。
- ・サポーターは取り立てて何かをやるわけではない。認知症の人から学ぶ。認知症の人は、自分自身が年を重ねた後のイメージとなる。自分がどう生きるのか、ステップアップ研修で考えられるように。
- ・現在世話人は数名しかいないので、認知症本人・家族ひとりひとりにキメ細かい連絡が出来ていない。まずは、「翼」があるということ、「パートナー」として連絡してもらえただけで助かる。
- ・歳をとって機能が落ちていくのは当たり前。いつかは誰もがなる。ゆるやかに次の環境に移行できるとよい。その人が所属している活動(地域のサロンなど)を継続しながら、認知症になっても役割を見つけていけるとよい。そういう視点をもって支援できる人を多く育てられるとよい。(包括)
- ・ステップアップ研修の受講対象者は、サポーター養成研修受講者でなくてはいけないのか。地域でどの人が受講した人かは把握していない。受講した人も自分自身がサポーターと認識しているか疑問。過去受講者の掘り起しは難しい。
- ・民生委員、福祉委員など、力のある人、認知症の人のことわかって対応してくれている人が多くいる。その人たちが対象になるかな、と。
- ・ステップアップ研修を修了したら、サポーター(パートナー)クラブなどとして、自主的な組織として活動してほしい。受講者は意識の高い人が集まると考えられる。行政が全部できるわけではなく、地域包括ケアを考える上では、地域人材の活用が不可欠。

関係者ヒアリング結果まとめ

2 サポーターにはどんなことを学んでほしいですか？

※本人には、「サポーターと一緒にやりたいことは？」

【本人の声】

- ・本人の「できるところ」を見るようになってほしい
- ・よく知りもしない人と散歩するのは抵抗がある。(信頼関係を築くことが大事)
- ・4・5年前だが、楽器の演奏に誘われたが、連れて行ってくれる人がいると助かる。

【家族の声】

- ・傾聴できる
- ・認知症に対する偏見を、この人たちがなくしていけるように。
- ・サポーターは、知識はあっても実際にどのように動いたらいいか分からないために活動が出来ないことも多いと思う。困っている認知症の人を見かけた時に「こうするといい」という身近な事例を紹介することで、「私でも出来るんだ」と思うのでは。
- ・認知症本人が出かける際、どこに行くのか不安なので、後ろから追いかけていく。家族の私自身も大変。「助っ人」が欲しい。何人かいた方が助かる。
- ・お世話役の人だって認知症になる。その人のプライドを大事にしながら接していくとよい。
- ・基本的な対応の仕方。言ってはいけない、してはいけないことなどを学んでほしい。

【その他】

- ・医学が中心ではない、社会モデルや生活モデルを理解してほしい。感性をどう育てるか。
 - ・「認知症になってもいい地域」にしていくために、認知症をどのモデルで認識するかを明確にする。
- ⇒サポーターにアンケートを取り、現状でサポーターは認知症をどのモデルで認識しているかを把握する。
- ・認知症の方に、どんな支援・どんな対応をしたか等の「事例紹介」があった方がいい。
 - ・必ずしも認知症サポーター養成講座を修了している人ではなくても構わないと思うが、最低限の認知症に関する知識がないと困るので、ステップアップ研修では、「おさらい」の意味ももたせて再度、基礎知識の確認をしてもらいたい。
 - ・現在、ケア会議の場を活用して町内会や社協の人に研修をしている。認知症サポーターもフォローしていかないと知識が薄れてしまう。民生委員、社協の人はほとんどが受講していくつもオレンジリングを持っている。
 - ・燕沢包括の時には、小学生3~4年生を対象にサポーター養成講座を実施。子供から親に伝えられていくことを期待した。
 - ・実践的なことよりも、認知症に関する基礎知識を習得してほしい。基礎知識があることで、「認知症かもしれない」「ちょっと普段と違うな」という“気づき”になり、地域の中の声掛けや目配り、相談や見守りのきっかけになる。
 - ・個人情報の守秘義務など基本的な約束
 - ・皆が認知症になる可能性があること。誰でも歳をとる事と同じと考えてほしい。
 - ・医学知識より心理の知識がほしい。認知症の人の気持ちを理解できるような話が聞きたい。

- ・色々な事例で対応方法を学びたい。
- ・**実際に当事者の方と活動しろと言われても難しいかもしれない**
- ・繰り返し学んでいただくことが大事。
- ・サポーター講習受講後に、気持ちがあっても活動が出来ない人に対しては、どのような活動事例があるか、具体的に示した方が活動のきっかけになるのではないかとのこと。
- ・対応技術
- ・事例があると良い。どんな相談があって、どんな流れでどこにつなげばよいのか知りたいと地域から要望あり。
- ・認知症サポーターって何？実際どんなことができるか。
- ・テキストには、**都市部・農村部など地域の実情に合わせた事業の進め方を紹介してほしい。一律にこんな地域づくりをしましょうと言われても地域によってはそぐわない場合がある。**
- ・ステップアップ研修では、山崎先生に**医学モデルから社会モデルへの変遷**について冒頭で講義をしてほしい。
- ・石原先生による**権利についての内容**も。「〇〇してあげる」ではない。やりすぎないことの重要性を伝える。
- ・①「もしも自分が今、認知症と診断されたら」を考える演習 ②市版・個人版ケアパスの利用。個人版ケアパスを実際に記載してみる。③基本的な知識
- ・事例報告あってもよいが、どのような事例がよいか。
- ・演習は実際の活動に結び付けられるものを。
- ・e-ラーニングを使っては。

3 テキストワーキングのメンバーには、どんな方々に参加してもらいたい？

- ・丹野智文さん。スケジュールの関係でWGに参加できなくても、メンバーとして名前を入れ、資料は見てもらう。もしくは、こちらから丹野さんに会いに行けばよい。
 - ・他の当事者の方にワーキンググループへ参加いただくのは敷居が高いかもしれない。例えばおれんじドアや、みはるの杜診療所で開催している若年性のおれんじドア（第2木曜日、～12：45）ののあとにヒアリングしてみるなど。
 - ・仙台市在住の当事者にこだわらなくても、本人の声を入れてみては。
 - ・福祉大の学生は、活動はしているが、認知症サポーターとしてではない。ただ、**学生をメンバーに入れることは良いと思う。若い目から見ると、外から見るとどう思うかの声**が大事。
 - ・ワーキングで形をまとめるというよりも、**たくさんの方の声を聞くことが重要。**
 - ・ケアパス作成時のメンバーと同じでも構わないと思うが、本人だけではなく、家族にも入ってもらいたい。ただ、ワーキングは夜開催でしょうから、現在介護している家族は難しいかも。そうだとするならば、世話人ならいいかもしれない。
 - ・認知症ご本人は、丹野智文さんだけではなく、おれんじドアのメンバーに、認知症本人の方で、初期症状である方をどなたか推薦してもらいたい。
 - ・**包括職員は、今まで参加していないところに参加してもらいたい。ただし、人員の安定しているところを選んでほしい。スタッフが少ないところは無理。**
- ※介護指導者にメンバーとして参加してほしい旨お伝えした。
- ・ちネットとして誰か推薦していただく。

関係者ヒアリング結果まとめ

4 (当事者・家族) ケアパスの使い勝手

- ・個人版ケアパスについては、本人・家族には渡した。最後のページに名前を書いてもらい、そのうえでケアパスの説明もした。その後の感想等はまだ聞いていない。
- ・個人版ケアパスについて、そういうものがあることを知らない方も多いのではないかと。包括支援センターではどのように配布しているか分からないが、銀行・郵便局・コンビニ、あるいはフリーペーパー等でも周知した方がいいのではないかと。今は、ケアパスの存在は、元々認知症のことが分かっている方しか知らないのでは。
- ・まだ本人には渡せてない。認知症を隠す地域。泉区などの先進地とは異なる。家族、地域の人の認知症への偏見も高い地域。
- ・みはるの杜診療所の川井 PSW が積極的に配布している。個人版ケアパスを読むと、皆ハッとしている。ピアサポートにつながる流れができている。

5 (包括) サポート医・かかりつけ医との顔の見える関係づくりの方法

- ・認知症について誤解しているサポート医やかかりつけ医もいる。
- ・医療と介護が連携できるようなしくみづくりが必要。包括はそれぞれに医療機関とつながるよう活動しているが・・・。
- ・現場ではサポート医、認知症かかりつけ医が見えてこない。研修を受けても認知症のことがわかっていない医師も多い。包括としては、身近な繋がれる医師を増やしていくだけ。
- ・包括4～5圏域で、医療と介護の関係者の合同会議や研修会など開催するとよい。たとえば、DASCの研修な共通のツールでの医療と介護の情報共有など。1包括圏域だけでは地域との連携はできるが、医療福祉の連携と考えると狭い。
- ・この会議等に当事者や家族も入ってもらうことで、地域包括ケアになる。

6 サポート医

- ・認知症サポート医同士の交流の機会を設け、その際に初期集中支援チーム員が活動を発表するなどできたらよい。
- ・何よりも、仙台市の方針を認知症サポート医に伝えることが重要。
- ・認知症サポート医は、初期集中支援チームやおれんじドア、個人版ケアパスなど、地域のリソースを知らなければいけない

関係者ヒアリング結果まとめ

7 その他

●認知症サポーター関係

【テキストについて】

- ・本人ガイドや個人版ケアパスがすでにできているので作りやすいと思う。
- ・包括向けの講習でも使えるものになるだろう。また、医師が地域で講話するときにも参考にできるものに。
- ・現行のテキストは、認知症の人を“探して”“見つけて”何かをするという内容で、一方通行。
- ・仙台市版認知症共通テキストのようなものを作れるとよい。(医師も認知症サポーターも使える)
- ・昨年度、八幡の生協でサポ講後にアンケートを行った。「今後、ボランティア活動などに協力できそうですか」という問いには、「協力したい思いはあるが時間がない」などの回答が目立った。包括で認知症カフェを開催している地域であり、また対象者は生協の地域活動に参加されている方たちだったので、包括としても期待する部分があったが…現状としては、具体的な活動までまだ結びつかないようであった。
- ・アンケートの「スキルアップ研修を受けてみたいですか」の問いには「受けてはみたい」との回答が見られた。何かしたいという気持ちはある。
- ・サポ講を行うときには、最後に「目配りや見守り・声掛け」くらいからやってみませんか？」と伝えている。これまでは伝えただけで終わってしまっていたので、これからは何かしたいと思っている人が活動に結び付けるようにできるとよい。
- ・活動への思いはあっても、行動に出る人は少ない。年代も様々だが親の介護の問題や、子育てなどで時間が作れないという現状。

【キャラバンメイトステップアップ研修】

- ・今年度の研修で使うテキストはパイロット版にする。研修の反応を見て修正を行い3月末に一旦発行し、来年度増刷してはどうか。一度やってみないとわからないこともある。

●認知症予防について

- ・“予防”をやることの副作用がある。「予防したのに認知症になった…」「いろいろ取り組まなかったから認知症になった…」など。
- ・大事なことは「孤立予防」。孤立予防が早期診断につながる。この点は矢吹先生とも協力しながら進められるとよい。

●その他

【本人の声】

- ・「翼」は好きであるが、運転出来ないと来られない。
- ・間もなく75歳になるが、自動車免許書き換えが心配。免許が無くなると、「翼」に来られなくなる。「翼」はホッとする場所で、心が落ち着く場所。
- ・恥ずかしいから、あまり他人に相談できない。
- ・認知症の人だとレッテルを貼らないで。

関係者ヒアリング結果まとめ

・ヘルパー2級資格を持っていて、自分自身も人の介護をした経験あり。自分自身が軽度の認知症であるが、介護経験があるゆえに、(申し訳なく思い)遠慮してしまう。

・「翼」があつて助かっている。もう少し、「翼」のような場所を増やしてほしい。(住まいの近くだと助かる)

【家族の声】

・(認知症本人を)24時間見ているので、自分の時間が全くない(家族)。若年性認知症の介護施設が無い。デイサービスはたくさんあるが・・・**介護者に対する精神的なケアが欲しい。**

【その他】

- ・民生委員、福祉委員が一生懸命で頑張りすぎる傾向あり。つぶれてしまう。頑張りすぎないように注意が必要。
- ・地域包括に関わり3課の情報共有、連携を望む。違うことを言われたりする。
- ・基礎研修も専門職だけでなく、一般人にも拡大すべき。他都市ではすでに一般向けに展開している。
- ・ステップアップ研修の修了者に何か認定症のようなものを与える。ステップアップ研修修了者にはシルバー、基礎研修修了者にはゴールド資格など。励みになる。
- ・修了者で何か活動したい人に、施設や事業所を紹介するのはOK。要綱作って、関係機関に周知するとよい。できれば認知症のデイや小規模多機能型施設やグループホームなどがよいかも。認知症に限らず高齢者一般のボランティアも歓迎する。サポータークラブができ、活動の管理ができればマッチングできると思う。
- ・施設では見守り、話し相手から始まり、技術が向上すれば食事介助、更衣支援、シーツ交換も。買い物の付き添い、園芸、囲碁将棋など、生活を豊かにするための活動へのお手伝いをしてもらえると助かる。介護職不足の中、将来的には、地域の元気な高齢者が支え手に回るしくみが必要。
- ・講座終了後に個人情報をもとめるなら、包括ではなく今活動している団体はどうか?例えば八木山社協は既に色々活動している。活動場所はいくらかでも提供はできる。(廣瀬さん)
- ・包括に情報をもらっても持て余してしまう可能性もある。紹介場所が認知症カフェなどに限定されてしまうかも。頂いた人の情報を使わずに終わってしまうかが心配(松永所長)
- ・八木山包括にて実際に介護施設でボランティア経験をサポーターにもらった事があるが、なかなか積極的に活動するのは難しい様だった。20人ぐらいで参加したがそのまま継続できたのは1~2名程度。長く続けていくのはやはり難しい。
- ・太白社協で秋保包括と組んで、秋保地区で、介護施設で今後活動してもらうためのボランティア講座を3回コースで実施予定。活動場所が既に決まっているため、講座を開くが、実際に活動できるかはやはり不安。
- ・SBLも同じように養成はしているが活躍場所がないという問題を抱えている。参考になるのではないか。個人情報の取り扱いについては、活動している団体に渡すのは難しい。やはり間に行政機関が入ってくれる方が安心する。
- ・地域では「認知症」という言葉を出すと敬遠される。認知症という言葉ではなく、高齢になると機能が落ちていく、低下するのは当たり前であり、その中に認知症があるという位置付けで伝えている。

関係者ヒアリング結果まとめ

- ・介護小規模多機能型居宅介護をしている。認知症で、在宅でも施設でも難しいという人が、ここでうまくいくこともある。他職種連携が可能、タイムリーなケース会議ができる、サービスが包括的かつ柔軟に提供され、今後増えていくと思われる。(現在は市内10カ所程度しかない)
- ・支援者はどうしても家族の側に立ち、家族の声を代弁した支援になってしまう。現場の職員には、医療への見極めなども含め、アセスメント力をアップさせていくことが大事。
- ・昨日の初期集中のチーム員会議の報告を受けた。医療につないだのに戻されたケースについて、理不尽と感じる包括もあるかもしれないが、石原Drの丁寧な説明で職員は納得した様子だった。
- ・認知症の捉え方は地域によって様々。包括の役割として、地域が認知症の課題から取り残されないよう、理解のある周囲の人から根気強く伝えていく必要がある。地域課題を伝えていくことは大事。(認知症の有病率など)自分事として捉えられるように。
- ・町内会の役員も民生委員も繰り返し伝えていくことで、3~5年で変わっていく。今は種まきの時期と思い、根気強く伝えること。
- ・ステップアップ研修受講の証明に認定カードやバッジは特に男性には効果あると思う。
- ・サポーターにもレベル差があると思う。初級・中級・上級の段階があった方がよい。ちなみに七郷地域では、まだ認知症への意識は低く、「何かちょっとお手伝いできれば」レベル。
- ・介護研修室からこの団体にサポーター養成講座をしたかの情報をもらいたい。